

◆突飛な行動の背景に認知症の影

2020年大河ドラマの主役、明智光秀が起こした本能寺の変。いったい彼はなぜあのような行動に出たのでしょうか。

一説として注目したいのは、光秀の病です。光秀の出自や年齢は不詳ですが、信長より年長で60歳を超えていたのは確かです。とすれば、そろそろ認知機能に異常が出てきてもおかしくありません。現在では、世界中の国で、高齢化とそれに伴う認知症患者の増加に悩まされています。認知症は、色々な脳の病気が引き起こす認知機能低下の病態を総称したものです。原因となる病気としては、アルツハイマーや脳血管疾患、レビー小体病などがあります。この中の、レビー小体型認知症、光秀はこの病気だったのではないかと疑われています。

◆好物を手にして不可解な行動

光秀は、今でいうところの「ちまき」を好んで食べていました。ちまきは、三角の形にした笹の葉にもち米を入れ、水に浸したあとにゆでたものが原型です。大量に作り置き

をし、そのたびにゆでればよかったので、当時は携帯食として武士たちに重宝がられました。つまり兵糧でもあったのです。もち米は糖として脳の栄養になるとともに、笹の葉自体に抗菌作用があるので、手軽な保存食として発展してきたものと思われれます。

本能寺の変の4日前、光秀にちまきが献上されます。本来ちまきは、いぐさを解いて皿の上に笹の葉を広げ、少しずつ切つて食べるのが礼儀というところがちょうどそのとき、まさに「聞」の音が聞こえ、すわ敵かと慌てた光秀は笹の葉に包まれたちまきをそのまま口に入れてしまいました。

これを単なる慌て者ともみることができませんが、光秀は文武両道・冷静沈着であったといわれます。ちまきを葉っぱごと口に入れたのは、慌てていたのではなく、認知機能の障害、つまり笹の葉をはがして食べることが知っていても、食べる段取りがわからなくなったからとも考えられるのです。

◆インテリゆえの弊害

認知機能の障害に加えて、光秀は近視だったともいわれます。光秀のたった一枚

だけ残る肖像画、これを見ると、端正な顔に切れ長の目であることがわかります。福知山・御霊神社に鎮座する光秀の木像もやはり目が細い。どうやら目を細めるクセがあったと解釈すると、光秀は強い近視だった可能性があります。

実際、兵法本から歴史書まであらゆる書物を読んで過ごしたとのこと、近視であった可能性は大いにあるわけです。当時は現代と違って、夜は真っ暗な闇の時代。強度の近視に加え、脳の認知機能低下が光秀に錯乱をもたらし、突飛な行動を起こす要因になったのかもしれない。

歴史に残る人物で、討たれたにもかかわらず実は生きていたという伝説が残るのは、それだけ惜しまれた証拠でもあります。光秀は、落ち武者狩りにあって殺されたと伝わりませんが、本当は生存し、その後徳川家の側近として活躍した僧・天海ではないかとの説が流れます。歴史家は否定しているとはいえ、それだけ人々から死を悔やまれたのだと考えると、史実を物語としてあれこれ想像するのもまた、歴史との楽しい付き合い方といえるのではないのでしょうか。



うえだ みつゑ  
植田美津恵

医学博士・医学ジャーナリスト。愛知医科大学医学部客員教授、東京通信大学准教授。日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書に「江戸健康学」「戦国武将の健康術」など。近著「忍者ダイエット」も好評発売中。

